

The Kamenori Community かめのりコミュニティ

公益財団法人 かめのり財団は、日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を通じて、
未来にわたって各国との友好関係と相互理解を促進するとともに、
その架け橋となるグローバル・リーダーの育成を目的に事業を行っています。

 公益財団法人
かめのり財団
Kamenori The Kamenori Foundation

2018年11月 No.29

中学生交流プログラム(インドネシア)



今号の内容

- ◇ ベトナム高校生にほんご人100人訪日事業
- ◇ にほんご人フォーラム2018
- ◇ かめのりスクール2018
- ◇ 高校生短期交流プログラム
- ◇ 大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会 in 鹿児島
- ◇ 中学生交流プログラム
- ◇ 外務大臣表彰受賞
- ◇ 高校生カンボジアスタディツアー

ベトナム高校生にほんご人100人訪日事業

国際交流基金での歓迎会

2018年6月26日(火)～7月5日(木)ベトナムのハノイ市、ダナン市、フエ市、ホーチミン市の高校生各10名、日本語教育関係者各3名、あわせて52名が訪日しました。



ベトナム留学生座談会



詳細は次ページにてご紹介します。

ベトナム高校生にほんご人100人訪日事業

開催最終年となった今年も、独立行政法人国際交流基金での歓迎会、駐日ベトナム大使館、文部科学省への訪問、関東国際高校、東京学芸大学附属国際中等教育学校、東京外国語大学、早稲田大学、東京ネットウェイブ専門学校、東京デザイナー学院を見学したほか、ベトナム留学生座談会、小学生による和太鼓の演奏、浴衣の着付体験、箱根や明治神宮、板橋区エコポリスセンター、江戸東京博物館、グリコピア・イーストへの訪問など日本文化と日本事情を体験するプログラムに意欲的に参加しました。また、10月には今年度事業の報告会がベトナムで行われました。

早稲田大学にて



浴衣の着付体験



駐日ベトナム大使館にて



小学生の和太鼓演奏



関東国際高校で同世代と交流



4都市で行われた報告会

「3年間を振り返って」

国際交流基金 ベトナム日本文化交流センター 所長 安藤 敏毅

国際交流基金ベトナム日本文化交流センターでは、かめのり財団と共同で、2016年度から2018年度までの3年間にわたり、ベトナムで第一外国語として日本語を学習する高校生100人とその学習環境を支える日本語教育関係者の方々（日本語教師、学校長、教育行政関係者）に対し、グループとしての訪日機会を提供し、日本視察、日本の関係者との対話・協議を通じて、日本理解を深めていただくための事業「ベトナム高校生にほんご人100人訪日事業」を実施してきました。

ベトナムにおいて日本語を勉強している高校生、中学生の数は、2015年時点の調査では、全国で11,000人近くに達しています。現在、その数はさらに増えていると思います。しかし、これほど多くの高校生・中学生が日本語を勉強しているのにも関わらず、実際に日本に行き、日本人と触れあい、日本の文化を体験したことのある生徒はまだわずかです。まず、第一外国語として日本語を学習している高校のうちから10校、各校10人の生徒グループを単位として、3年間に100人の高校生に直接の日本体験をしてもらおうということをかめのり財団と共同で実施してきました。

3年間を通じて、ベトナムの高校生は、日本の高校生と一緒に授業を受ける、昼食を共にする、教室掃除を体験する、スポーツと一緒にやる等のさまざまな形での交流を通じて、同世代同士のつながりを深めることができたよう

す。また、大学や専門学校を訪問して授業見学や体験をし、また、先輩のベトナム人留学生の話聞くことで、日本への留学も視野に入り、進路選択の幅を広げた生徒も出ています。さらに、日本社会が課題として取り組んでいるゴミの分別処理から環境問題を考えることも経験してもらったことで、自分たちのベトナム社会をあらためて考える機会にもなっている様子もうかがえます。

帰国後の報告会での発表や報告文集のなかで、日本社会、日本文化、日本人に対する興味深い見方もたくさん示されています。マンホールの蓋のデザインの芸術性に関心を持つ高校生、小学生による和太鼓演奏披露に伝統文化継承の素晴らしさを感じる高校生もいました。また、日本人の時間厳守、真面目な仕事ぶりに感心すると同時に、少し驚いた気持ちも聞かれました。そうした日本人と比べて、ベトナム人は外交的、社会的と考えている高校生も多く、ベトナム人と日本人と一緒に仕事をする時には、ベトナム人が交渉や営業等の対外的な業務を担当し、日本人が事務や企画等の社内的な業務を担当すれば、チームでよい仕事ができるという、日越協力のモデルを考えた生徒もいました。

この事業では、高校生の訪日に合わせて、そうした若い世代の日本語学習を支えている日本語教師、校長・副校長、そして地域の教育行政関係者の方々にも参加していただきました。

高校生同様、日本理解を深めていただくともに、生徒の日本での発見や気づきを間近で見ていただくことで、生徒の日本語学習や日本理解の意義を考えていただきたかったからです。

これら関係者の方々からは、帰国後、生徒が熱心に日本語学習に取り組むようになった、コミュニケーション力が上がったという声の他に、生徒が日本語学習の先にある留学や日本で働くこと等自分の目標を定め、それに向けての学習ということを意識するようになったという、うれしい報告がありました。

生徒の保護者からも、帰国後の生徒の変化として、あいさつをする、マナーを大切に、時間を守るという姿勢が見られるとの意見をいただいています。また、従来、家族に頼っていたことを、何でも自分からするようになったとの報告もいただいています。

わずか1週間程度の訪日ですが、吸収力のある高校生には、私たちが想像していた以上に、日本の多くのことに関心を持ち、感じえる機会になったようです。同時に、ベトナム社会のことをより深く考える機会にもなっているものと思います。今後、この高校生たちが、日本のよい点と課題、そして、ベトナムのよい点と課題、その双方についてさらに考えを深め、それぞれの国の文化や人の特徴を生かしながら、日本とベトナムの関係のこれから支える人材として活躍してくれることを期待しています。

にほんご人フォーラム 2018 (インドネシア) [Japanese Speakers' Forum 2018 in Indonesia]

まだ緊張の面持ちの開会式。地元バリの高校生も交えて

ファシリテーターの先生方



高校訪問でガムランに挑戦

ASEAN 5カ国(インドネシア、タイ、フィリピン、ベトナム、マレーシア)の中等教育機関で日本語を教えている教師と日本語を勉強している高校生、そして日本の高校生が、ともに学び交流する「にほんご人フォーラム」。今年は、インドネシア共和国のバリ島で8月23日(木)から開催し、教師は7日間、高校生は5日間のプログラムに参加しました。

日本語教師たちは

今年のにほんご人フォーラムはこれまでの開催地日本を飛び出し、インドネシアのバリ島で実施しました。5カ国から参加した教師は各々の国で、これから生きる若者たちに必要な能力ー21世紀型スキルをどう授業に取り入れるかについて課題を抱えています。フォーラム中は同スキルを評価するためのアクティブ・ラーニングの理論や思考ツールについて紹介し、教師同士で意見交換、自国で取り組める方法について模索しました。特に「生徒の批判的思考やコラボレーション」の評価方法にフォーカスしました。生徒プログラムの活動の様子を観察、評価し、教師同士で意見を述べ合い、より使いやすい評価方法にする。日々変化する評価表を見ながら、帰国後にほんご人

フォーラムの理念をどう実践するか、多くの気づきを得ることができました。

さらに、ファシリテーターとして4人のインドネシア人日本語教師が協力しました。フォーラムが、現地教師によって自立的に運営されることを目指した試みです。最初はおぼつかない様子でしたが、幾度もわたる協議や練習により、自らの役割をしっかりと捉え運営に参画できるようになりました。フォーラムで得た気づきや学んだ実践方法を多くの現地教師へ広めていくことが期待されます。



「にほんご人フォーラム」とは

かめり財団と独立行政法人国際交流基金の共催事業。国際社会で日本語を使って協働できる「にほんご人」が増えるように、これからの時代に求められる能力を培うための外国語教育、日本語教育について考え実践するとともに、中等教育における「にほんご人」ネットワークを形成し、若い世代の相互理解の促進とグローバル人材の育成を目指しています。



「にほんご人」について深く考えました(写真上・下)

高校生たちは

5日間という短い期間で、「にほんご人としてできること」という大きな課題に、多国籍の仲間と取り組んだ高校生たち。初日は、初対面・言葉のハードルもあり、緊張した面持ちでしたが、アイスブレイクやグループ活動を通じて瞬く間に打ち解けました。バリ舞踊のワークショップでは複雑で難しい指使い、目使いに苦勞しながらも見事踊り切り、翌日の交流会は全員で各国の遊びを楽しみました。

課題についても協力して取り組みました。バリ歴40年以上の日本人の講演、日本語を学ぶバリ高校生たちとの交流、日本人観光客に対応するホテルやツアー会社でのインタビューなど。多様なにほんご人と対話し、考えを深めた高校生たちは、発表会前日ホテルのあちこちで集まり、夜遅くまで練習を続けていました。発表会では、映像を駆使したりドラマを演じたりなど、発表方法にも創意工夫が見られました。短い日数の中で、協働して課題に取り組み、工夫し、交流を深めた高校生たち。これからの時代を担う世代として、フォーラムで得た経験を役立たせてほしいと思います。

報告：国際交流基金 ジャカルタ日本文化センター
副所長 蛭田麻理



教師たちも熱く意見交換

かめのりスクール 2018

アジア6カ国の12人の高校生と18人の日本人中高生が、
①コミュニケーション能力を伸ばす ②グループ活動を通して、深く考える力、創造する力を伸ばす ③異なる文化を持つ人との交流を楽しむ、を目標として、助け合って課題に取り組み、友情を育みました。



「かめのりスクール@東京」

2018年7月22日(日)～27日(金)

7月21日から22日にかけて来日したインドネシア、韓国、タイ、中国、フィリピン、マレーシアで日本語を学んでいる高校生12人は、27日からの「かめのりスクール@御殿場」参加の前に「かめのりスクール@東京」プログラムとして様々な体験をしました。渋谷、原宿、新宿の街歩き、和太鼓と茶道の体験、歌舞伎座ギャラリー、江戸東京博物館、藤子・F・不二雄ミュージアム見学、2泊のホームステイなど、本国の教科書やテレビ、インターネットの情報からでは得られない日本の「生」の新旧の文化に触れました。また数日間共に過ごすことで、仲間としてお互いを尊敬しあう笑いの絶えない楽しいグループができあがり、日本の文化だけでなくそれぞれの国の文化を学びあう様子が見られました。

報告：かめのり財団 橋本成子

新宿にあるパブリックアートの前で



藤子・F・不二雄ミュージアムでは童心に返って

「かめのりスクール@御殿場」

2018年7月27日(金)～30日(月)

教師として、日本やアジア諸国からの30人の参加者のための4日間の計画をたててほしいと言われた時、私は、「何を教えたいか」ではなく「何を学んでほしいか」が正しい問いだと考えました。

最近インターネットで、なんでも見つけることができます。参加者たちは数秒で知りたかったことをすぐ知ることができますが、正しい、そして信用できる答えを見つける方法、そして21世紀だからこそ必要なスキルを学ぶことが必要です。ここでは、コミュニケーション、コラボレーション(共同作業)、クリエイティビティ(創造性)の3つのスキルを重要視しました。

相手をよく知らなければ共同作業は難しいことです。そこでまず参加者の皆さんはオリエンテーリングに参加しました。その後はアジアを象徴する旗を作り、「伝えた」ことと「伝わった」ことの差を考える様々なアクティビティに取り組みました。

グループごとに、国連の持続可能な開発目標(Sustainable Developmental Goals 略してSDG)のメッセージを伝えるポスターとジングル(簡単な歌と踊りでメッセージを伝える手法)を作るというタスクを与えました。良いジングルやポスターの特徴は説明しましたが、SDGが何かは教えず、自分たちで考えてもらいました。

共同作業のスキルを伸ばすために、どのSDGを選んでポスターを作るかで話し合い、初対面の人とコミュニケーションを取ることを学びました。このコミュニケーションのほとんどは、円形段ボール「えんたくん」を囲んで行われました。5人がまるくなって座り、「えんたくん」をひざにのせることで、グループの距離を近づけました。

グループは、日本人参加者が3人、日本人ではない参加者が2人と構成されていたので、チャレンジのひとつは、全員がディスカッショ

ンに参加できるかでした。生い立ちや環境によってSDGの見方、視点が違うことは当たり前でした。

トピックを決めた後は、メッセージを考えました。ここでは、アイデアから計画を考えるために先生たちも大事な役目を果たしました。ディスカッションで勢いがついたグループもあれば、もっと話し合いが必要なグループもありました。私の役目は、質問をすることで考えさせることでした。

私は、質問の答えを知りませんし、意見も言いません。コミュニケーション、コラボレーション、クリエイティビティを助長するのが私の役目です。答えを見つけたと思ったグループが、考えてもいなかった事実に気づくこともありました。

大学生スタッフからのフィードバックという新しい面も今年がありました。5人の大学生が参加者の努力をモニターし、ポスターとジングルのフィードバックをしました。

フィードバックする側は自分の意見を言いたくなるものです。しかし、先生が「○○したらどうですか」と言えば、先生が望んでいるような完成品を作ろうとします。これを避けるために、大学生にはポジティブなコメントをもらい、改善できると思うことについて質問をしてもらいました。これによって参加者たちに何を達成したいのかを考えさせました。

多くの計画、準備、練習を終え、月曜日にプレゼンテーションがはじまりました。

ひとつの観点から見れば、最終のプレゼンテーションは完璧ではなかったかもしれませんが、時間の管理が下手で準備が整っていなかったグループもあれば、声が小さいグループもありました。でも私たちが学んでほしいと思っていたのはプレゼンテーションのスキルではなく、コミュニケーション、コラボレーション、クリエイティビティの3つのスキルです。大成功でした。

初対面で会話すらした事のない人たちが一緒に作業するのを見ました。会話を聞き、しぐさ

初日、それぞれの目標を掲げました



言葉の壁を乗り越えてディスカッション



民族衣装でかっこよく



を見て、挑戦やストレスにうち克つ皆さんを見ました。

4日間で、皆さんはSDGについてたくさん学び、お互いのことも学びました。かめのり財団を通して、参加者たちの間に長続きする友情のかけ橋ができ、人生を変える経験ができたと思っています。

報告：ゲスリング・アニタ(教師)
ゲスリング・リア(訳)/かめのり財団(編集)

「えんたくん」に自由に書き込み、思考を深めました



アジアの高校生の声

- 日本語を4年も勉強していたけど、以前はずっとただの科目として学んでいた。この活動を通して日本人と交流ができて本当に嬉しかった。
- このプログラムに参加して私は変わった！他の国の人の文化を受け入れることを学んで、オープンマインドになった。世界に敵なんていない。みんな友達になれる。
- 毎日の「振り返り」の時間によって、ポジティブな考え方を学び、自分を成長させることができた。

日本人中高生の声

- 参加して新しく発見したことについてきました。
- 海外の人の交流の楽しさ
 - アジア(人、国、文化)は楽しい、おもしろい
 - いろいろな考え方や楽しみ方を学べた
 - 人種、民族という壁は存在しない
 - 自分の考えを伝えることの難しさ
 - 自分の狭い視野
 - 挑戦することのかっこよさ

大学生スタッフの声

星野侑子(東京外国語大学)

御殿場キャンプの初日は日本人参加者とアジア生の意思疎通がお互い手探りの状態だったが、4日間交流を深める中でまるで国の違いなどないかのように親密になっている彼らの様子に、私自身も学ぶことが多くあり、刺激をもらうことができた。しっかり先生方の日本語の説明が理解できているか、アジア生に電子辞書を使って確認してあげている日本人参加者の様子や、関西弁の参加者に積極的に話しかけて関西弁を教えてもらい、それを実際に使用するアジア生など、驚くような成長をたくさん目の当たりにすることができた。このようなアジア内での交流活動が、彼らの人生に大きな影響を与え、何か人生の分岐点、将来を考えるきっかけになることは間違いないと感じた。

高校生短期交流プログラム

公益財団法人 YFU 日本国際交流財団との共催事業として、2018年も日本人高校生10人を夏休みの約1カ月間、韓国に派遣しました。ホストファミリーと生活しながら、現地の高校に通うという貴重な体験をした生徒たちからは帰国後、食事や生活習慣、建築、芸能から歴史問題まで多岐にわたり感想が寄せられました。

■ 今年の短期留学のうち、とても心に残ったもののひとつが、YFUオリエンテーションで行った戦争記念館です。先史から現代に至るまでの朝鮮半島における戦争と軍事に関する展示がされていて、主に朝鮮戦争が中心の記念館です。私は

今まで、日本と韓国との歴史にしか目を向けていませんでした。けれど、戦争記念館へ行って、初めて韓国と他の国の問題について知りました。そこで、私の韓国の知識量の少なさに気がきました。そして、日本を主体として考えるのではなく、客観的に多くの方面から物事を捉える大切さに気がきました。

■ オドゥサン統一展望台という場所へ行きました。川の向こうに北朝鮮のケプンの農村の風景を見ることができ、望遠鏡を覗くとすぐそばに暮らしている北朝鮮の人々や建物を間近で見ることが出来ました。昔、韓国と北朝鮮が北と南に分かれた時、たくさんの人々が大切な人と離れ離れになり苦痛な日々を過ごしてきたと知りました。

オリエンテーションにて



戦争記念館に行きました

大学院留学アジア奨学生 夏の研修交流会 in 鹿児島

研究の進捗発表と交流の促進を目的とする夏の研修交流会を鹿児島県鹿児島市にて、2018年9月9日(日)～11日(火)に行いました。異分野の研究を互いに発表し意見交換を行ない、寝食を共にすることで、絆と知識を深める機会となりました。今年はOB1名が参加し、現役奨学生を激励しました。

研究の進捗発表



OBの姜民護も駆けつけ、現役奨学生にエールを送りました



フェリーにて



桜島が見えました

鹿児島空港に到着後、桜島と鹿児島市内を巡るバスツアーに参加しました。その日の夜はフリーディスカッションを行い、自己紹介や直面している悩みなどお互いの話をし、研究発表の前に新入生からOBまで親睦を深めました。中には「魚をさばく動画を見るのが好き」といって意気投合するメンバーもあり、2時間があっという間に過ぎました。2日目からは各奨学生による研究発表が行われました。分野は文学、歴史、法学、福祉、国際貿易、言語学など多岐にわたりました。新入生は初めて参加した感想として「いつも同じ分野の人の発表ばかりを聞いているが、違う分野の人の話を聞いたのが新鮮だった。理解しづらいところもあったがとてもいい勉強になった。他の人からのフィードバックは有益だった」と述べました。また、ミニ講義では、OBの姜民護が研究の進め方や大学在籍中にすべきことなど自身の体験を紹介し、現役奨学生にとって今後の可能性を考える貴重な時間となったようです。

また今回、鹿児島県の高校で英語教師をされている今吉弘哉先生が初日参加くださり、鹿児島の地理や方言を教えてくださいました。より有意義な訪問になりました。

報告：かめのり財団 齋木香澄

「南国でかめのりファミリーの新たな絆を作りました」

文：白 瑞(ハクスイ)(中央大学)

9月9日(日)から9月11日(火)の3日間に、南国の鹿児島で恒例のかめのり財団アジア奨学生夏の研修交流会が行われました。初日、鹿児島が悪天候なので行けるかどうか心配しましたが、飛行機は定刻で離陸しました。しかし、着陸前に激しい揺れを感じまるでジェットコースターに乗っているような気分、長時間の揺れは怖かったです。

到着後は鹿児島市内の半日バスツアーでした。空が曇っていましたが、運良く城山展望台で桜島の全貌が見えました。その後、仙巖園で綺麗な庭園と薩摩切子を満喫し、桜島に向かいました。残念ながら、悪天候のため湯之平展望所からは霧しか見えませんでした。午後の楽しい観光を経て、夕食後にフリーディスカッションが行われました。ここで皆、自分の研究の悩みや生活の悩みなどを話し合い、困っている仲間と真剣にアドバイスする場面もあれば、冗談を交えて皆が笑う場面もあり、リラックスした雰囲気でお互いの理解を深めました。

2日目から研修交流会の要である研究発表です。各奨学生が研究内容と進捗状況についてわかりやすく説明しました。分野はそれぞれですが、同じ研究者の道を歩んでいる仲間として共感できる部分が多く、とても有意義な議論をし

ました。3日目の最後は、OBである姜さんが将来の進路について自身の経験を語りました。先輩からいただいた貴重なアドバイスを今後の研究生生活に活かしたいと思います。

そして、この3日間の中で一番印象的なのは西田事務局長の特別講義で、一生の宝になる貴重な言葉をいただきました。「人生の大切な〇〇と〇〇」とは、「運と縁」「覚悟と勇気」「感謝と謙虚」です。自分がかめのりファミリーの一員になるのはまさに運と縁です。これからも、覚悟と勇気を持って、感謝と謙虚の気持ちを忘れず、前向きにチャレンジし続けたいです。3日間という短い間でしたが、新奨学生を含めてかめのりファミリーの皆さんと新たな絆を作ることができたと深く感じています。



第10回中学生交流プログラム インドネシアへの派遣

公益財団法人AFS日本協会と共に実施する中学生対象のプログラムの第10回目は参加生の募集対象地域を北海道とし、インドネシアへ派遣しました。「多様性の中の統一」をテーマに、2018年7月14日(土)~15日(日)に出発前研修を行い、8月4日(土)~13日(月)に現地研修としてイスラム教・キリスト教施設への訪問、スマトラ島へのフィールドトリップ、現地家庭へのホームステイ等を実施しました。

まず、震災に見舞われた北海道の皆様から心よりお見舞い申し上げます。今回の派遣中学生は北海道選抜ですので、心配や不安もさぞかしのことと拝察いたします。

さて、一行は早朝の眠気とともにスカルノ・ハッタ空港に到着、東南アジア特有の湿った空気に迎えられました。北海道在住の中学生たちにはきっと新鮮な経験だったのでしょう、湿気に驚嘆する声が繰り返し聞かれました。

驚いたのは気候だけではなく、ジャカルタのバイクの多さ、混とんとしながらも互いにぶつからない巧みで不思議な道路、市場で売られる見たことのない品々。すべてが驚きの連続でした。スマトラ島に移動した後は、シボルガの田園風景に心をほぐされ、船で2時間半かけてたどり着いた無人島のあまりの海の美しさに息を飲みました。大都会ジャカルタの喧騒とはまったく違うインドネシアがそこにはありました。

シボルガ滞在中、中学校訪問ではたくさん

の友人ができた一方で、ホームステイに伴う2つのカルチャーショックを経験しました。ひとつはトイレ、もうひとつは食事のマナーです。トイレには紙がなく、代わりに水桶を使ういわば「手動ウォシュレット」。関連して、現地では直接手で食べますが、右手しか使ってはいけないというルールがあります。左手はトイレ用なのです。だから握手も右手、物を渡すときも右手。覚えておかねばならない大切なイスラム圏の習慣です。

というわけで、今回もまたインパクトの強い中学生プログラム@インドネシアでした。

報告：四日市大学 環境情報学科
メディアコミュニケーション専攻教授 山本伸



民俗村の伝統家屋前で記念写真

無人島の誰もいない浜辺で



「日本ってどんな国?」「日本には〜」



三輪タクシー「バジャイ」で通学



インドネシア定番のフォークダンスを習う

康本健守 (かめのり財団創設者・評議員) が 平成30年度外務大臣表彰を受賞

2018年8月、在香港日本国総領事館が平成30年度外務大臣表彰の伝達式を行い、かめのり財団創設者・評議員の康本健守が受賞いたしました。外務大臣表彰は、国際関係の様々な分野で活躍し、日本と諸外国との友好親善関係の増進に多大な貢献をした人々の中でも、特に顕著な功績のあった個人及び団体が授与されるというもので、康本のアジア・オセアニア地域の青少年の文化交流支援や、日本と諸外国との相互理解の促進に寄与した様々な活動が評価されました。



松田邦紀 大使 兼 総領事 (右)と康本健守 (左)

第5回高校生カンボジアスタディツアー

2018年8月4日(土)～8月11日(土)、かめのり財団と公益社団法人日本ユネスコ協会連盟との共催による「第5回高校生カンボジアスタディツアー」が実施されました。国際協力の現場への訪問や現地の人々との交流を通して、カンボジアへの理解を深め、ひいては国際社会、地域社会の課題解決に貢献する若者を育成することを目的とし、全国から選抜された10名の高校生が参加しました。

ボランティアに関わるようになり約30年。初めて海外研修の団長として事前研修・本研修に参加し、一研修生としてキリングフィールド、ツールズレン博物館といった「負の遺産」、国立博物館の「国宝」、大使館訪問、バイヨン遺跡での保存・修復事業、寺子屋・夜間識字教室見学、クメール織物製造の「伝統の森」見学等、多くの体験学習をする中で、この研修が当初の不安から大きな喜びへと昇華していきました。同時に向学心旺盛な高校生との貴重な出会いを提供して頂いたことも含め関係各位にお礼を申し上げます。どの生徒もすでに研修前から将来の目標を明確に持っていることに先ず驚かされました。また、その実現に向け日々の努力を実践してきており、最終日ミーティングで、研修報告と今後の課題を堂々と述べる姿にさらなる感動をもらいました。将来、彼らが必ずや各分野のリーダーとして国際社会に貢献していくことでしょう。



キリング・フィールド慰霊塔参拝



アンコールワット集合写真



夜間識字クラス視察



バイヨン寺院石像修復体験

今回、日ユ協連カンボジア事務所スタッフの奮闘ぶりに特に感銘させられました。地域の現状に精通しており、住民の生活改善のために大いに汗を流す姿を実際に拝見できたことは幸いでした。10分で到着しそうな村に入るのに1時間以上かかる悪路、電気設備のない家々、電球2個の暗い中での夜間授業等、インフラの改善も急務だと思われませんが、村人は、一見不自由な生活にも関わらず、常に満面の笑顔で接して下さいます。薄暗い夜間教室で「少し見れば十分だ」と言いながら必死に文字を学ぼうとする女性と子どもは輝いていました。家庭訪問先では焼きバナナ作りを体験。早朝から作り販売し家計を助けながら、寺子屋で学び将来の夢を語る女の子に感動しました。日本での募金活動や書き損じはがき回収活動等のユネスコ活

動と現地住民の日常生活とが見事にリンクしていると実感でき、また今後の活動活性化へのヒントを得ました。現地スタッフの活動が地域の発展の重要な鍵になると思われま。現地事務所に最大限の支援をしていくことが、このプロジェクト成功にとって最も現実的かつ効果的な方策だと確信しました。精神的豊かさに包まれたこの地に郷愁を感じ、再訪したいと思いつつ、まずは日本各地の協会・教育機関が現地事務所とネットワークを構築し、必要に応じて協働体制がとれるようになり、将来的には人的交流も活発になることを期待します。最後にこの貴重な機会を与えて下さった、かめのり財団、日ユ協連をはじめとする関係各位に改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

報告：大分県ユネスコ協会連盟 会長 丸尾直彦

今後の予定 (2019年)

- 1月 かめのりフォーラム 2019 / かめのりセッション 2019
かめのり中高生アンバサダープログラム (フィリピン派遣)
- 2月 かめのりカレッジ 2019
- 3月 大学院留学アジア奨学生 新奨学生授与式・同窓会

発行人 / 西田 浩子 編集 / 堀井 玲子 デザイン / イワフチサトシ (BUTI design) 印刷 / 佐伯印刷株式会社



日本とアジア・オセアニアの若い世代の交流を支援します！

公益財団法人 **かめのり財団** The Kamenori Foundation

〒102-0083 東京都千代田区麹町5-5 ベルビュー麹町1階

TEL : 03-3234-1694

FAX : 03-3234-1603

E-mail : info@kamenori.jp

URL : http://www.kamenori.jp/